

かのくに
迦国あやかし後宮譚

シアノ Shiano



アルファポリス文庫

第一章

『宮女募集』

通りに立てられた粗末な板には、そのたった四文字が、やたらと達筆な文字で書かれている。

その掲示を見つけた私は、お使いの途中だというのに、ついふらふらとそちらに引き寄せられていた。

本当は真面目にお使いに行つて、急いで帰らなければ怒られる。そう分かつてはいても、私の足は根を張ってしまったようにその板の前から動かなかつた。

季節は早春。

暦の上では春であつたが、まだ名ばかりの寒々しいこの季節。

私の着ている擦り切れたお下がりの着物は、スカスカと冷たい風を通して、防寒の

役には立っていなかった。往來を行き交う人混みも土埃が立つばかりで風除けにはりたくない。急ぎの早歩きであれば体も温まるが、立ち止まっていると即座に冷え始める。

けれども私は宮女募集の文字に釘付けになっていた。

小さな期待に胸が高鳴る。もしかしたら、と思うのを止められなかった。

その掲示に足を止めているのは私ひとり。ひっきりなしに人通りのあるこの道で、ここだけが閑散としている。そうでなければ人より小柄な私には掲示が見えなかっただろう。

だからこそ、これは運命なのかもしれない、なんて思ってしまうのだ。

宮女募集の掲示の横には小男がぼんやりとした顔で酷く退屈そうに立っていたが、掲示板の前に陣取る私に気が付いて、鷹揚にこちらを向いた。

中年だと思ふけれど、眉の薄いつるりとした顔には髭もなく、どこことなくおぼさんのように見える男だ。おそらくは噂に聞く宦官とやらなのだろう。

私はごくつと唾を呑み込み、その男に話しかける。

「こんにちは。あの……この宮女募集って……」

「ああ、皇帝陛下の後宮で働く宮女の募集だよ」

小男は相変わらずぼんやりとした表情でそう言った。暇だからぼんやりしていたのではなく、これが常態らしい。

「と言っても今回はただの下働きの宮女募集だね。それでもいくつも条件がある。若く健康で、生娘であること。不美人も駄目だ。お前さんは――」

言葉は切って私の顔をじつくりと見た。

私は特別な美人でもないが、幸いなことに不美人というほどでもない。平凡な顔であるのは重々承知だ。

「うん、まあ、受からなくてもいい、というところか。だが、それなりの家柄も必要だね、裕福な商家だとか、役人の家系じゃないといけない。下働きでも読み書きや計算なんかの最低限の教養が必要なのだ」

次いでその男は、私の着ている擦り切れた着物に視線を落とした。

お下がりの上衣は色褪せており、裳には繕った跡がある。手持ちの着物の中でもとりわけ古びている部類だ。こんなことなら今日はもう少しましな着物にしておけば

よかった。身を縮めたくなるのを堪えて立つ。

幸い、宦官かんがんはこんな酷い格好の私にも淡々と話しかけてくる。

「お前さん、裕福な商家の娘には到底見えないね。だが文字は読めるのか」

「商家ではないけど、役人の娘よ。まあ一応、といったところだけれど。読み書きも出来るし、自分で言うのもなんだけど、こう見えて力持ちだし、とにかく丈夫よ。あ、お金はかかる？ 先に言っておくと、私一銭も持っていないの」

「ふうん」

男は気の抜けたような鼻息を漏らす。

確かに酷い襤褸ぼろをまとった私は役人の娘には見えないだろう。我が家で働く小間使いだってもう少しましな着物を着ている。

顔も平凡だし、私にはこれといって取り柄がない。あるのは病知らずの健康なこの体だけである。その体すら栄養が不足しているからか、チビで痩せっぽち。姉とは一歳しか違わないというのに、あちらはすでに大人の女性らしい体付き、私の方はガリガリで丸みはかけらもない。

「まあ、良いか。戸籍の写しを出さねばならんから、どうせ不正も出来まいよ。それに試験だってある。試験を受けるだけなら金はかからんが、門前払いになる可能性だってあるよ。それでも良いかい」

「それでも良いです！」

私は食い気味に答えて、力強く頷く。

何せこれまでろくな目に遭ってこなかった。これからだってそうだろうから、出来ることならなんだって試してみたい。それにしただってお金がかからないのは僥倖ごうじやうだ。私には自由になるお金もないのだから。

宦官かんがんは首を傾けるように頷く。

「そうかい。それでお前さん、年と名前は？」

「十六歳よ。名前は——」

「——おい、待て待て、どこが十六だ。そなた、良いところ十三、四にしか見えないだろう！」

「はあ!？」

突然、横槍を入れられてカチンときた。

いつの間にやら私と宦官かんがんの横に大男が立っており、話を立ち聞きしていたらしい。

私は文句を言ってやろうと険しい顔で大声の主を振り向き、その姿に思わずギョツとする。それもそのはず。見るからに不審ななりだ。

その男は雨でもないのに笠を被っていた。それも長い垂布たれぎぬが付いた笠である。薄い紗しよのような布だから笠の内側からは外が見えるのだから、垂布たれぎぬで腰辺りまでを覆おほっているため、こちらからでは顔どころか上半身が全く見えない。かろうじてその声と体付きから男であるのが分かる程度。

おそらく旅装束なのだろう。垂布たれぎぬの笠は街道を歩く時、日差しや砂埃すなぼこから目を守るために被る。だがこんな街中では、邪魔にしかならない笠は外して歩くのが普通だ。その異様な風体に、眉根を寄せていた私は目を見開いた。

あの宦官かんがんも大男を見ている。ほんやりとした表情ながら今までで一番目が大きく開いているから、さすがに驚いているのかもしれない。

一瞬ひる怯ひるんでしまったが、それでも一言物申さねば気が済まないで口を開いた。

「な、なんですか、貴方には関係ないでしょう！」

「いや、たまたま聞こえたのだが、往来で十六歳などと嘘を吐いているのが耳に入ってきたゆえな。下手したら十三以下でもおかしくあるまい。そんなちんちくりんのか

せして、サバを読みすぎであろう」

「なんですって！」

確かに身長が低いせいで若く———というか幼く見られがちではあるが、まさか十三歳以下に見られるとは思ってもみなかった。うら若き乙女になんとという言い草だ。

この廻国かいくにでは十六歳ならもう成人だ。私も立派な大人と自信を持って言えるわけではないが、結婚だつて出来るような年齢なのに、道を駆け回る浪はな垂たれ小僧共と一緒だと思われるのは屈辱くつじやくである。

「身長が低くて悪かったわね！ 成長期なんだからこれからだつて伸びるわよ！」

「そうかあ？ そんなに痩せて、ちゃんと食べておるのか？ 食べねば伸びるものも伸びぬぞ」

「そうね、義理の母が食事抜きにしない日ならね！ つてもう、アンタはなんなのよ。私、こう見えて忙しいんだから、あつちに行つて！」

「……待て。待て待て。食事抜きとはなんだ。そんなに幼いというのに、そなたは継母ははにいじめられておるのか。庶民向けの物語でもあるまいに」

「なんだつて良いでしょう。アンタには関係ないんだから！」

腹の底がカツと熱くなり、そのまま言い返した。腹が立って毛が逆立っているのか、うなじがピリピリとする。

「言っておくけどね、そんな境遇なんて別に珍しくもなんともない。そこら辺にゴロゴロいるし、いちいち同情される筋合いもないわよ。自力でどうにかするために宮女の募集に乗っかろうとしてるんじゃない。邪魔しないで！」

私はその男に犬を追い払うみたいに手を振ってから、思いつきり顔をしかめて、べえっと舌を出した。

男はもう言い返してこなかった。言い返してきたとしても、無視するつもりだったが。

「ごめんなさい、お待たせしたわね。まさかちよこつと騒いだからって、この場で断つたりなんてしないでしようね」

私は笠の男を追い払い、宦官かんがんの方へ向き直った。宦官は我に返ったようにしきりに瞬きまばたをして私に視線を戻す。

「あ、ああ。まあ……驚いたが、そういうこともあるだろうさ」

それほど驚いている様子には見えなかったが、本人的にはそうでもないらしい。

「ええと、どこまで聞いたか。年は十六で、名前は」

「私の名前は朱莉珠しゅりじゆ。朱色まろやかに茉莉花まりかの莉なま、それから珠と書くの。朱家の娘よ」

男は落ち着きを取り戻したのか、手にしていた木の板に携帯用の細筆でサラサラと書き込んだ。

「それで、家は役人、と。……おや、朱家で役人といえば、この辺りでは朱高殿しよこうしか知らないが」

「それが私の父です。この先の通りにある朱の屋敷が私の家」

「ふむふむ……朱家には二年ほど前に、美女と評判の娘御を後宮にどうかという話を持っていたことがあったんだが……確か娘は一人しかおらず、跡取り娘だから婿を取らねばならぬのだと断られたはずだ」

「それはそれでしようね」

私は苦笑いをする。さっきの笠の男とのやりとりで薄々は境遇を察していることだろう。

「私は妾腹の娘なんです。多分、二年前に声をかけたというのは、私の姉しよかの朱華しよかでしよう」

「ああ……なるほどね。大体分かったよ。それじゃあ、後で朱家にもう一度話を持っていこう」

「ありがとう！ あの、貴方の名前を伺っても？」

「私は楊益だ。察しの通り、宦官だよ。それでも、まあ、あまり期待はしないように」「ええ！ それじゃあ、またお目にかかれることを祈ってる！」

楊益はぼんやりとした表情のまま頷き、また往來に視線を戻した。笠の男はもう見える辺りにはいないようだ。

私は再びあの輩に絡まれないよう、そそくさと急ぎ足で歩き去った。

その帰り道、私はお使用で頼まれた酒の大瓶を担いでいた。重い買い物やきつい仕事は小間使いではなく私の仕事となっている。おかげで力は強いし、体も丈夫だ。

私はずつしりと重い酒瓶を運びながら、先程の掲示を思い返していた。

宮女——後宮で雑務を行う女性のことだ。今回は下働きと言っていたから、妃候補やその側付きではなく、身の回りの世話や雑用をする宮女の募集ということなのだろう。

私の住まう迦国では後宮制度が存続していた。だが、かつては数千人の女たちがいたと言われている後宮も今は随分と規模が小さいのだと聞いたことがある。

「確か、新しい皇帝が即位したばかりなんだっけ」

一年ほど前、即位の前後はそれはもうお祭り騒ぎであった。もちろん私は忙しくこき使われただけで、なんの恩恵もなかったが。

その前は女帝だったはずなので後宮の必要性が低かったのだろうが、ようやく増やし始めたらしい。

下働きの宮女でも見た目の美しさが必要なら、平凡顔の私なんてお呼びじゃないかもしれない。しかし飯炊きや掃除婦はまた別の枠だろう。もし宮女が駄目だとしても、どうか宮中で働けないか頼んでみようか。

宦官が熱心に宮女を探すのは、自分が見つけ出した宮女が妃候補となり、皇帝の寵愛を受けることになれば、後々の出世にも関わってくるからだとか。それが行き過ぎたのが、かつて行われたという宮女狩りだ。

私は先程の楊益を思い返す。あまり熱心そうではなかったが、ちゃんと私の相手をしてくれた。

むしろあれくらい熱心でない方が良くもきれない。私には大それた望みはない。とにかく少しでも早く家を出たいだけ。

私は肩に食い込む縄をしつかりと握って酒瓶を背負い直すと、真っ直ぐに前を見据えた。



「遅かったじゃないか！ 何をサボっていたの！」

「すみません」

お使いを終わらせた私は、帰って早々、義母の苛立った声に出迎えられた。

ああ、またか、と思つたが声には出さない。

「本当にお前はサボるのが得意なこと。なら食事はいらさないわねえ。そんなにサボつてばかりではお腹も空かないでしょう」

私は唇を噛み締めて、嫌味つたらしい義母と目が合わないように視線を伏せた。

機嫌の悪い時の義母はとにかくトゲトゲした声でこちらに当たり散らし、時には棒

で叩いてくるものだから、たちが悪い。食事抜きにされるのも珍しくない。

確かに今日は楊益と話したので、多少は遅くなつたかもしれない。それでもあまり遅くならないよう、人の少ないところでは走つたほどだ。だが、こうして罵られるのは遅かつたからではない。義母は妾腹の私がただひたすら憎いだけなのだ。

しかし口答えなどすれば何をされるか分からない。腹立たしくとも我慢するしかなかった。ただでさえ一日二食もらえれば御の字の食事を、これ以上減らされては敵わない。

「——まあまあ、お母様。そんなに怒鳴らなくても……外まで聞こえていてよ。それより、ちよつと小腹が空く時間でしょう。お母様もお茶の時間にしましょうよ、ね？」

場を取りなしながら奥から出てきたのは腹違いの姉、朱華だった。

美女と名高い姉は私と違い、一度も日に焼けたことのないような白い肌をしている。仕立てたばかりと思しき真新しい着物に、手入れの行き届いた黒く艶々した髪。金の細工に赤い珊瑚玉の付いた華やかな簪を挿しているその姿は優美で、誰が見ても裕福な家の子女だ。この美貌であれば後宮から声がかかるのも当然だろう。姉と自分を比べても惨めにすらならない。そんな気持ちとはどうの昔に擦り切れていた。

姉は無垢な微笑みを浮かべて、愛らしく母親の袖を引いている。義母もそんな愛娘に袖を引かれては、蕩けるような甘い声を出すしかない。

「おや、本当に華々は優しい子なこと。そうね、向こうで甘い菓子でも食べましようか」

義母は小間使いにお茶を頼むと、私のことは忘れたみたいに行ってしまった。

「――厨に貴方の分も用意させるから大丈夫よ。後でこっそり取りに行つて」
通りすがりに、姉からそっと耳打ちをされる。

「……姉さん、ありがとう」

私がそう言うと、姉は唇の端を上げて静かに微笑みを浮かべた。

私は義母には疎まれてはいるが、腹違いの姉はこうして優しくしてくれる。しかし姉だつて正面切つて母親には逆らえない。今のように気を逸らそうとしてくれるのが精一杯だ。それでも見て見ぬ振りの父親よりはずっとましだし、ありがたい。

食事抜きにされるのは、成長期には特にこたえる罰だ。今日は食事抜きどころかおやつまで食べられそうで、珍しく良い日だった。ウキウキしながらも、足音を立てずにそっと厨へ向かう。足音がうるさいと叩かれるせいで、猫のように足音を立てな

いのがすっかり癖になっていた。

自室で、厨から持ってきたおやつにかぶりついた。

減多に食べられないおやつ。しかも好物の包子だ。冷めていたが甘い餡が入つていて美味しい。今日は走つたのでお腹が空いていたから尚のこと。

元は物置だつた狭くて日当たりの悪いこの部屋は、かなり冷える。だがそのせいもあつて、寒がりな義母はこの部屋に近付くことは減多にない。私の数少ない安息の場所だ。

たった一つの家具である長持に入っているのは、義母に取り上げられずに済んだ若干の着物と祖父が残してくれた書物や書き付け、それからこれ。

私は大事にしている練り香水を取り出した。

平たい二枚貝の綺麗な貝殻に、軟膏状の練り香水が、かつてはたっぷり入つていた。

もう残り少ないが、顔に近付けて匂いを嗅ぐと、懐かしい茉莉花がほのかに薫る。

これは祖父の形見だつた。幼い私に作ってくれた茉莉花の練り香水。毎日付けるよ

うに、と言いい、なくなりかけたなら足してくれた祖父はもういない。最後の練り香水も、間もなく尽きようとしていた。

私はそれをほんの少し薬指に掬い取って耳の後ろに付ける。普段は朝にしか付けな
いが、今日は良い日だったから、特別に自分へのご褒美だった。

暗い室内に茉莉花の香りが漂う。その懐かしい香りを嗅ぎながらいつものまにか目
を閉じていた。



暗闇の中、どこからか子供の笑い声が聞こえる。

楽しそうに、無邪気に笑っている子供。

——いや、あれは幼い頃の私の声だ。

——ああ、ではきつとこれは夢なのだ。懐かしい、祖父との思い出。

——もう十年も前のこと。

暗闇から、かつて祖父と暮らしていた小さな家が現れた——

幼い私は、誰もいない部屋の暗がりに向かって楽しそうな笑い声を立てていた。

「——それでね……あ、爺ちゃん！」

「苺珠や、お前、一体誰と話してるんだい」

「んー知らない！ でもね苺珠を撫でてくれるの。お話もしてくれるよ！」

「……そこには誰もおらんよ」

「いるもん！」

「不憫な子だ……」

祖父は私を抱きしめる。

私が寂しさのあまり空想上の友達を作って慰められていると思っていたらしい。
しかし、私にはソレが見えていた。私にとっての現実だったのだ。

「寂しくさせてすまんなあ……」

まばらに生えた髭が、頬をちくちくと刺激するのがすぐつたくて、私は笑う。

「なあに、爺ちゃん、くすぐつたいよお」

私は祖父が大好きだった。たった一人の私の家族だったのだ。時に厳しく、時に優しく、私を育て導いてくれた祖父。

だが私の見えていたモノは祖父には見えていなかったのだ。

——人ならざるモノ。それは黒っぽかったり、白かったり、ほとんど人と変わらなようなモノもいた。獣や鳥の姿に見えたこともある。はっきり見えたり見えなかったりと、日によっても異なっていた。そこにいるのが当たり前過ぎて、幼い私は疑問にすら思わなかったのだ。

やがて祖父も私が人ならざるモノを見ていることに気が付いたが、そんな奇妙な私を気味悪がることなく可愛がってくれた。私もたった一人の家族である祖父が大好きだった。

「爺ちゃん、この草？ こっちの葉っぱは？」

祖父は薬草を摘み、それを煎じて作った薬を売り生計を立てていた。私は少しでも祖父の役に立ちたくて、あちこちから草を引っこ抜いて集めた。

「おうおう、よく見つけたな、莉珠。こっちの草は歯痛に効く。この葉は咳止めだ。」

莉珠は覚えが良いな

「やったあ！ ねえ、もっと探してくる！」

「これ、莉珠。あんまり遠くに行くんじゃないよ」

「はーい！」

その日も、まだ薄暗い早朝に家を抜け出し、小さな藤籠を手にはふらふらと川沿いに来ていた。家の庭にも薬草は生えていたが、川沿いには種類の違う薬草が生えていたからだ。

覚えたばかりの薬草を摘み終え、近道にと、当時の私よりもずっと背の高い葦の合間を通っていた。そんな私の耳にどこからともなく泣き声とも叫び声ともつかぬ声が聞こえてくる。不思議なその声に、うなじがピリピリとした。

人気のない川の近く。普通の子供であれば恐れて逃げたかもしれないが、当時の私は好奇心の方が勝っていた。私の周囲にいた人ならざるモノは総じて私に優しく、危害を加えられるとは思いませんでした。

「だれかいるの？」

その泣き声は私の呼びかけでピタリとやむ。だがもしも本当に泣いているなら放っておけないと、再度声をかけた。

「ねえ、泣いてんの？」

「……泣いてなどいない」

「でも……。えっと、迷子なら爺ちゃんを呼んでこようか？」

すると、ガサガサと葦を掻き分ける音と共に、見たこともないほど美しい少女が目の前に姿を現したのだった。

「シッ、大きな声を出すでない。人も呼ばないでおくれ」

声が近いのもそのはず。私のいた茂みのすぐ側にいたらしい。まるで誰かから隠れるように屈んだままである。

「……そなた、この辺りの子供か」

艶やかな黒髪を結いもせずに垂らした大きな目の美少女は、こちらをじいつと見つけた。彼女の瞳の色は実に鮮やかな青色をしている。泣いているかと思ったが涙は浮いていない。睫毛が長く、瞬きをするだけでパサパサと音を立てそうだった。

子供心にも驚くほどの豪華な着物を身につけている。お金持ちの子女か何かである

のは間違いなく思えた。

それまで一番の美少女だと思っていた、本邸に住む姉の朱華よりも美しい。年頃は姉よりも少し上くらいだろうか。

「青い目……」

私はその目を見て、目の前の彼女が人ならざるモノだと理解した。

祖父から教わった人間の見分け方によると、人の目の色は黒や茶色をしているらしい。確かに私も祖父も黒い瞳である。

ずっと遠くの外つ国には青や緑のような綺麗な色の目をした人間もいるらしいが、あまりに遠いのでそう会うことはないとも聞いていた。

つまり、この青い瞳の少女ははっきりと見えるし、こうして言葉も交わせるが、人ではないということなのだろう。

「……あなた、人じゃないの？」

私の問いに、美少女は目を数度瞬かせた後、ゆっくりと頷いた。

「——そうだ。だから、追われておる。もし捕まったらきつと殺されてしまう。このことは誰にも言わず、ここから立ち去ってほしい。父上——いや、お父さんにも、お

母さんにも言ってはならぬ」

「お母さん、死んじゃって、いない。お父さん、いつも大きい家の方にいて、たまーにしか来ないの。爺ちゃんはいるけど……」

「では、爺ちゃんにも秘密だ」

「うん。いいよ、ひみつ！」

そして、その美少女の白い足が血で濡れているのに気が付いた。

「あ、血！ たくさん！」

足首よりやや上の辺りに刻まれた傷は深く、綺麗な着物にまで血が滲んでしまっている。私はその血の量におろおろした。最初に聞こえた泣き声のような呻き声は、傷が痛むからだだったのかもしれない。

「お怪我、してるの？」

「……ああ。実は私は人魚なのだ」

「人魚？」

「ああ。この川を遡上していたら天敵に食われそうになり、やむなく岸へ上がったのだ。しかし人に見つかるのも危険ゆえ、そなたの爺ちゃんにも黙っていいよ」

美少女は少しばかり古めかしい喋り方をしていた。きつと、見た目よりうんと長生きしている魚の精なのだろう。そんな彼女が、私に合わせるために爺ちゃんという呼び方をするのがなんと可笑しい。

「葉、もってこようか？ 爺ちゃん、葉作れるよ」

「いや、そなたの爺ちゃんも私を見れば葉にしようと思うかもしれない。知っておるか？ 人魚の肉は万能の薬になるといふ。さあ、このまま静かにお帰り」

「でも、血が出て……。痛いよ？」

と、そこで私は手にしていた籠の中に摘んでいた葉草の存在を思い出した。

「あ、これ、葉草！」

私は美少女に籠の中を見せる。

「だが……そなた、治療など出来るのか。幼子であろう？」

「大丈夫、爺ちゃんから教わってる。これと、これ！」

たまたまだったのが、摘んだ葉草の中に痛み止めになる葉と、血止めになる草があったのだった。

「葉草……ほう、この辺りに生えておるのか。どれも同じに見えるが」

「よっく見ると全然違うよー。この草、痛くなくなるから、このまま噛んで。あとこっちの、血が止まる草。ちよつと待つてね」

私は胸元から手巾を取り出した。祖父が綺麗に洗ってくれている手巾だ。

血止めの草を軽く揉み、傷口に当てがい、手巾で塞ぐように巻き付ける。たったそれだけの拙い手当てだが、美少女は喜んでくれた。

「まこと、感謝する」

ほっそりした腕が伸ばされ、そのままぎゅうつと抱きしめられる。垂らした長い黒髪が私の頬をするすると撫でていく。その感触はこそばゆいが嫌ではなかった。彼女の髪からはとても甘やかな香りがして、私は息を深く吸い込んだ。魚だと彼女は言ったけれど、魚の生臭さは全くない。

「そなたは良い匂いがするな」

頬を擦り付けられながら、私よりも余程良い香りの人に言われて気恥ずかしい。自分がどんな匂いなのかは嗅いでもよく分からないが、いつか祖父が幼い子供は乳のような匂いがするのだと言っていた。

泣いていないと言っていたその人は、気が付けば青い瞳を潤ませて、ポタリと涙を

零している。その涙まで宝石みたいに綺麗で、そして私も悲しくなってしまった。

「泣かないで……まだ痛い？」

私は一生懸命腕を伸ばし、彼女を抱きしめ返していた。祖父があやしてくれるように、その背中をトントンと優しく叩く。

だが彼女はふるふる首を横に振った。

「——死んで、しまったのだ……」

「だが？」

「父が……。それに大好きだったあの人も、みんな……。私のせい……」

「人魚だから？」

「……ああ。私が——だから」

ぎゅつと強く抱きしめられて、その言葉はよく聞き取れなかった。

「……すまぬ。そなたのお母さんも……。死んでしまったのだったな」

「えっとね、赤ちゃんの時でね、お母さんのこと知らないんだあ。大きいおうちには、お父さんと、お母さんじゃない人がいてね、お姉ちゃんもいるの。でもそっちへ行ったら叩かれるから、行っちゃダメなんだ」

「それは……」

「でもね、爺ちゃんがいるんだよ。爺ちゃん大好き！」

「そうか……そなたは強い子だな」

「うん。爺ちゃんとね、あまい包子パオズがだーい好き。餡子あんこが入っているやつ！」

「そうか……可愛らしいことだ」

私の言葉でその美少女が微笑んだのを見て、とても嬉しくなった。胸がじんわりと温かくなる。私も笑いかけた。

「そなたに手当ての礼がしたい。しかし、今は持ち合わせもない。だから代わりにこれを……」

美少女は長い髪を持ち上げ、着物の襟えりを緩めると、そのほっそりとした首筋あらを露わにした。

すると現れたのは青銀の鱗うろこである。細く滑らかな美少女の首の付け根にチラホラと鱗うろこが生えていた。まるで飾りのように美しく、朝の光に煌めく。

「きれい……」

「ほら、これを持っておいき」

美少女は平然とその鱗うろこを一枚剥はがして私の手のひらに載せた。

「良いの？」

私の人差し指の爪くらの大きさの、綺麗な田鱗えんりんである。手のひらの上でキラキラと光っていた。

「私ほもうしばらくしたら、ここから姿を消す。だからそなたもお戻り。約束した通り、誰にも——爺ちゃんにも決して私のことを話してはならぬよ」

「うん」

「内緒の約束だ」

美しい少女は首を傾けて、白くほっそりとした人差し指を己の唇に当てる。その姿はこの世のものとも思えないほど美しく、不思議な色香に溢れていたものだから、やはり人のはずがないと感じた。

私はコクリと頷いて、彼女の鱗うろこを握り込む。

「……それがあれば、きつとまた会える……私の——」

そう言っ、彼女は私の額ひたいに口付けた。

なんだかすぐく胸の辺りがくすぐったくて、むずむずする。なのになじはピリピ

りしているのが不思議だった。
さらさらと川が流れ、微かな風で音を立てる葦の海。私は麗しく悲しい青い瞳の人魚にさよならと手を振った。

かつん、かつん、と碁石を打つ音がしていた。

家の前に卓を出し、祖父と祖父の友人である壁魏が碁を打っているのだ。祖父は楽しんで笑っている。どうやら勝負は優勢のようだ。

「なあ壁道士よ、次勝ったら僕にあの術を教えておくれ」

「あの貝の術か。そりやおまえさんが、あと三戦ほど勝ってからだのう」

「なんじゃいケチ——おや、莉珠おかえり。お前、朝飯も食わんでどこまで行っただい」

「ただいま爺ちゃん。壁道士、こんにちは」

壁魏は白い髭を山羊みたいに伸ばした、老齡の祖父よりも更に年老いた男である。

壁道士と呼ばれており、非常に博識な道士として近隣でも有名だったそうだが、どうもそれだけではなく、私のように見えないモノが見える力を有していたとか。祖父

に私の見え方が普通と違うことを教えたのもこの人だ。

子供が好きではないと公言する壁魏は、普段は私に近寄ることはほとんどなかったが、その時ばかりは驚愕した様子で碁石を投げ捨てて、大股歩きで私のところへやってきた。

「朱莉珠、手を見せなさい」

壁魏は私に詰め寄り、手首を掴む。一瞬、その目が青く光ったように見えた。青い瞳——それは先ほどの少女によく似ていた。

「……おい、どうしたんだい壁道士。孫に何があった」

祖父もただ事ではないと思つたのだろう。慌てふためいて追いかけてくる。

その頃には壁魏の瞳は黒い色に戻っていた。

「うむ、この娘から強い力——何やら呪いめいた危険なものを感じる。おい、どこへ行っていた？ おまえさん、何を持っていた？」

普段言葉を交わさない大人から強い言葉で質問攻めにされ、幼かった私は震え上がった。それでもあの美しい少女との約束は守り、硬く口を閉じる。しかし手のひらに握り込んでいた青銀の鱗は、隠す間もなく取り上げられてしまった。

「やあ！ 返して！」

「ああ、なんということを……。こんなものを持っていたら、すぐにあつちに引き摺り込まれてしまうぞ！ 朱羨、火を熾してくれ。この鱗は焼いた方が良さだろう」

「や、やめてよお！」

「莉珠、いかん。こつちにおいで！」

「いやーッ！」

そうしてあの人魚の美少女から貫った綺麗な鱗は、無残にもメラメラと燃える焚火に放り込まれた。

「朱莉珠の力は相変わらずのようだな」

燃え尽きた焚火を掻き回している壁道士の言葉に頷いたのは祖父だった。

「ああ。……大きくなればいずれ落ち着くと思っていたんだが」

「見えるだけではない。どうやらこの娘は好かれやすい性質でもあるようだ。このままではあちらに連れていかれかねん。全く困ったことだ」

どうすれば、と狼狽えた声を上げる祖父を無視し、壁道士は真つ白い髭を撫でなが

ら私に問う。

「朱莉珠や、おまえさんはこれをくれたアヤカシに名前を名乗ったか」

アヤカシの意味がピンとこなかったが、私は少し思い返してから正直に首を横に振った。

名前は名乗っていないし、彼女の名前も聞いていない。これに答えるだけなら彼女との約束を破ったことにはならないだろう。私は赤くなった目を擦り、そう考えた。

「そうか、それは何よりだ。おい、朱羨、おまえさんの孫はなんとかなりそうだぞ。とにかく、この娘は窓のない部屋にしばらく閉じ込めておけ。その間に繋がりを絶たねばならん」

「あ、ああ。……さ、こつちにおいで」

そうして狭い家の、唯一窓のない物置部屋に一人きりで丸一日ほど入ることとなった。

普段から蝟燭はなるべく節約していたから、古い油を皿に入れた灯火が薄暗い部屋の唯一の明かり。古い油は燃えると胸の悪くなるような臭いがして、祖父が置いて

いつてくれた好物の包子パオズを前にしても食欲が失せそうになる。

「—— 莉珠や、もう良いよ」

「爺ちゃん、もう出て平気？」

「ああ。壁道士が清めてくれたからね。よしよし、よう頑張ったな」

そうして祖父が、かさついた手で私の頭を撫なでてくれる。私はこの手が大好きだった。

壁道士はもう帰ってしまったらしい。私のために清めの香を焚たき、一晚中儀式をしていたのだという。

「一人でよう頑張ったご褒美だ。爺ちゃんが作ったんだよ。ほら、開けてごらん」

「わあ、綺麗！ 貝の中になんか入ってる！」

「練り香水というんだ。嗅かいでごらん。茉莉花まわりかの香りがするからね。お前の名前の莉珠まわりかというのは、茉莉花から取ったんだよ」

六歳の私の小さな手のひらに載せられた、当時は握り込めないほど大きかった貝殻の中には、たつぷりと練り香水が詰まっていた。

「これを耳の後ろにほんのちよつとだけ塗ってごらん。茉莉花まわりかの香りがお前を守って

くれるからね」

「うん！」

「毎朝、顔を洗った後に必ず付けるんだよ。爺ちゃんとの約束だ」

「はい！」

「それで、もしも爺ちゃんに何かがあったら……」

「爺ちゃん？」

「いや、なんでもないんだ。莉珠……」

祖父は私を強く抱きしめた。

「良いかい、この練り香水はとっても大切なものだ。—— 何があっても手放してはいけないよ」

それ以来、私は人ならざるモノが見えなくなった。壁道士が行ったのはきつとそういう呪まじないの類たぐいだったのだろう。

見えなくなったところで困ることもなかったから、かつて人ならざるモノが見えていたことも、あの葦あしの海の記憶もだんだん遠くなっていった。

どうやら横になっている内に眠ってしまったようだ。日はとつぷりと暮れ、部屋の中は暗い。

「なんだか懐かしい夢を見ちゃった……」

目を擦りながら夢を思い返す。

あの美しい人魚の妖は元氣だろうか。それから壁道士はその時点で祖父より年上に見えたが、まだ存命だろうか。

夢の中では触れられるのに、優しかった祖父はもういない。

「爺ちゃん……会いたいよ」

私は暗闇の中で膝を抱えた。

懐かしい茉莉花の香りは遠い。



試験への出立はもう明日に迫っていた。

楊益はぼんやりとした顔ながら存外に仕事が早かったらしく、私と話した即日に父との話を付けたらしい。私という存在を持って余した父には絶好の機会に感じたのだろう。私は無事に試験を受ける許可を得た。私に関することには何にでも反対していた義母も、もう父が決めてしまった以上文句を言えないようだった。

私はようやくこの朱家から逃げられるのだ。

仕事の合間を縫って荷造りを済ませると、物の少ない部屋がさらにすっきりとした。一番大切な茉莉花の練り香水は、いつものように耳の後ろに塗り、荷物の一番上に纏める。

今日は義母がやけに機嫌がよく、硬い麵麩だけではあったが朝食まで与えられた。きつと、明日には私がいなくなるのが嬉しいのだろう。

とはいえ仕事を言いつけられることは変わらない。薪を買いに行かされ、その後は休む暇もなく、街の反対側に住まう親戚の家まで酒の入った重い箱を届けに行っていた。けれどこんな生活も今日限りと思えば足取りは軽く、疲れも感じなかった。

頼まれた仕事が終わわり、空腹を抱えて帰宅すると庭に何かを燃やしているような焦

げ臭い空気が漂^{たよ}っていた。義母と小間使いが焚火^{たきび}に当たりながら話をしてる様子だったので、当たり散らされる前にそくさと自室へ戻る。

——そして私は部屋の入り口で呆然と立ち尽くした。

荷物が何も無い。

部屋はすっからかんになっていた。今朝まで使っていたはずのペラペラの薄い寝具すら、無い。

思わずへたりと膝を突く。足が体重を支えられなかった。

頭から血が下がり、貧血のようにクラクラとして、手や足の先が冷たくなっている。だというのに心臓だけはバクバクと嫌な鼓動を立てており、何度も浅い息を繰り返した。身を起こすことも出来ず、座り込んだまま地面に手を突く。

(——やられた)

義母以外にこんなことをする者などない。今までも機嫌が良くない時には、祖父の残した物を取り上げられたことがあった。

だが、まさか明日出立というこの日にまでやられるとは思ってもみなかった。それも、私の持つ、ほんの僅かなもの全てを取り上げるだなんて、それほど憎かったのか。

何故そこまでされねばならないのだ。ただ妻^{めかけ}の子として生まれたことがそれほどの罪なのか。

私は絶望感に支配され、しばらく動けずにじっと蹲^{すくまる}る。少しして、血の巡りがまともになってきたらしく、ようやく動けるようになった。

そこで私はハッと顔を上げる。

さつき帰宅した時に、義母が庭で何かを焼いていたのを思い出したのだ。

私は立ち上がり、庭へ走った。

庭へ行くと、義母はまだそこにて焚火^{たきび}にあたっていた。

そうして真つ青になっっている私の顔を見てニヤツと笑う。真つ赤な紅を塗った唇が腐った果実のように歪^{ゆが}んだ。してやったり、とでも思っているのかもしれない。

「おやあ、お前、まだいたのかい？　もう、とっくに出立したかと思うていたよ」

とっくに、のところが強調して義母は言う。

「何やら小汚い塵^{ゴミ}を残していったようだから、仕方なくこちらで処分しておったのだが、何か、忘れ物でも？」

「……出立は明日です」

しれつとそう言う義母をじっと見据えたが、当の本人は微塵も狼狽えたりはしなかった。横の年若い小間使いだけが困ったように目線を逸らす。

「おやまあ、私としたことが。日付を間違えたかねえ。このところ少し睡眠不足だったから。頭も痛いし、休まなければ」

義母は思い通りに手のひらの上で踊った私が可笑しくてたまらないのだろう。嘲笑を浮かべた醜い顔の下半分を袖で押さえている。

私はいつのまにか、両手の拳を強く握りしめていた。手のひらに爪が食い込んで痛みがあったが、それは怒りを堪えるのに丁度良いものでしかなかった。

もしここで怒りのまま義母に掴みかかれれば、宮女の試験を受けに行けなくなってしまう。それだけはどうしても避けねばならなかった。

それにまだ全ては燃えてないかもしれない。義母がさつさと立ち去れば、焼け跡から何か見つけ出せる可能性がある。そんな一縷の望みに縋って、この激情をやり過ぎしかなかった。

そうやって怒りを我慢し過ぎたのか、視界の端に黒い霧のようなものが立ち昇って

いる気がした。

——酷く気分が悪い。胸がむかむかしている。

「ああ、肩も凝っているね。肩が凝ると頭が痛くなるから。お前、私は少し寝るから、肩を揉んでちょうだいな」

「は、はい」

義母は惨めな私を満足そうにもう一度嘲笑ってから、小間使いを連れて去っていく。小間使いも申し訳なさそうに振り返り振り返りしていたが、そんな顔をするくらいなら、さつさと義母を連れて去ってほしかった。あの小間使いまで憎みたくはない。

私は義母達が立ち去るや否や、焚火に砂をかける。元々消えかけだったのか、火は簡単に消えた。焚火の薪を掻き回すのに使ったらしい火かき棒が側がっていたので、それを震える手で持つと焚火の跡を掻き回す。手が震えて力が入らず、両手で棒を持たなければならなかったが、私はひたすら掻き回し続けた。

けれど、本当は分かっていたのだ。もう火が消えかけということは、私の持ち物は燃やし尽くされた後なのだという。布や本は総じて燃えやすい。

ぐっ、と喉の奥が圧迫されたように苦しくて、それでも私は何かが出てきやしないかと灰をしつこく掻き回す手を止めなかった。

カツンと硬いものに棒が当たり、慌ててそれを掻き出す。

「これ……っ！」

灰から取り出したそれは貝殻の破片だった。

貝殻は火で燃やした程度で簡単に割れたりはしない。元々、燃やされたら中身はどうあっても溶けて使い物にならないだろうと分かっていた。練り香水は精油を蜜蝋で固めたものだから熱されれば溶けてしまう。けれど、入れ物にしていた貝殻くらいは焦げてでも残っていると思ったのに。おそらくは燃えにくそうだからと、念入りに踏みじりでもしたのでらう。

涙の膜が盛り上がったのを、私は袖で乱暴に汗と共に拭い去り、更に灰を掻いた。

それを繰り返して、親指の爪ほどの大きさの貝の欠片を三つだけ探し出すことが出来た。両手から棒を取り落とし、貝殻の欠片を拾い集める。焼かれていたばかりだからまだ熱いはずだが、不思議と熱は感じなかった。

(欠片でも、形が変わってしまったも、爺ちゃんの形見は形見だ！)

私は返ってきたそれを大切に握りしめる。視界の端の黒い霧も、胸のむかつきも、祖父の形見を手にした途端、全て消え失せていた。

今しがた見えていた黒い霧は一体なんだったのだろうか。

(目の錯覚……?)

それにしては、やけにはつきりと見えていた気がする。

そんなことよりも、と私はすっかり灰だけになった焚火跡の前にして息を吐いた。貝殻の破片しか残らなかった。今日寝るための寝具もないのだ。でも途方に暮れたところでしょうもない。出立が明日なのは変えようがなかった。

——私は酷い気分で見目を覚ました。

「……さむ……」

寝具なしで寝たせいで体が冷え切っていた。早春の朝には室内ですら寒さで息が白くなるほどだから、こうなるのも当然だ。

ゆっくり起き上がると体が強張って、軋むように痛む。起きてしばらくの間、体を撫でさすっていた。

散々灰を掻き回したために、体には灰がこびりつき、だというのに着替えすらなく、昨日も着ていた古びた着物姿。まさに着の身着のままである。おまけに寝具もない板張りの床に横たわっても、硬くて痛いばかりでろくに眠れるはずがなかった。

それでもまだ真冬でなかっただけ、まだ。真冬だったら朝を迎えられずに凍りついて死んでいたかもしれない。こんな時でも風邪ひとつ引かない健康な体であって良かったと思うしかない。

私は震える手の中に貝殻の欠片を握り、拳を作った。

体は冷え切っているのに、腸は今もぐぐつと煮えくり返っている。

「馬鹿……。爆発するのは今じゃないでしょ」

その激情を堪え、深く呼吸を繰り返して心を落ち着けた。

義母から逃げ出すには今しかない。

私が怒りのままに義母を糾弾したところで意味はなかった。きっとあの父親は見えて見ぬ振り続けるばかりだ。今はとにかくここから出ることのみを考える。もう守るべきものはこの体以外何もなく、身軽なのだからどこへだって行けるはずだ。

辛くても耐えるしかない。

きっと今が人生のどん底だ。

人生なんてままならないことばかりではあるけれど、ここが底なら後は這い上がるだけ。

絶対に幸せになるんだ。じゃないと爺ちゃんに合わせる顔がなくなってしまう。

私は気合を入れるために両手のひらで顔をビシヤリと叩いた。

「……そうと決まれば、顔くらい洗いますか」

灰だらけの着物はもう仕方がない。見てくれは酷く、これでは宮女の試験で門前払いもやむなしではあるが、そうしたら日銭仕事でもなんでもやって絶対に生き延びてやる。

宮女試験を受けるには身元を証明するため戸籍の写しが必要だそうだが、それは宮女以外の住み込みの仕事を探すのにだって使えるはずだ。

私は今この時、本当に腹を括く。

焼け残った貝殻の欠片をしっかりと握り直してから、顔をしゃんと上げて、数年を過ごしても愛着の湧かなかったがらんどろの部屋から出た。

朝餉あさげの匂いがどこからともなく流れてきて、私のお腹は無情にも空腹を訴えてくる。昨日の朝に硬くなった麵麩パンカシを齧かじってから何も食べていなかった。けれど今は厨くりやにも顔を出したくない。

私は井戸に行つて水を汲み、そのままガブガブと飲んだ。冷たいけれど水だけでもあるだけです。

次いで、冷たい水で顔と手足を洗う。手拭てぬぐいすらないので濡れた犬のようにブルブルと震わせて水を払った。

「――菫珠？　そこで何をしているの」

そう声をかけられて、思わずビクツと肩が跳ねる。その声が義母ではなく姉だと気が付いて息を吐いた。

振り返ると、姉は今起きたのか、綺麗な着物姿で露台ついかんの欄干らんかんにしどけなく寄りかかっている。

「もうすぐ出立ではなかったかしら。そんな汚れた格好をして……まだ着替えをしていないの？　お母様つたら、こんな日にまで菫珠をこき使わなくなつて――」

「いえ、この着物で行きます」

「え？」

私の硬い声に、何事かあったと気が付いたらしい。姉は眉を寄せて庭へと降りてくる。

「何かあったのね。貴方、荷物は？」

「……昨日、全て燃やされました。私にはもう何もありません。だから、もうこれで行くしかないんです」

「なんてこと……」

さすがの姉も絶句して目を閉じた。

「……菫珠、いらっしやい。私のお古で良ければあげるわ」

「……いえ、そうしたら今度は私が着物を盗んだと言われかねません。だから、もう結構です」

「そんなこと言わないで。体が冷たくなつてるじゃないの。ほら、湯を沸かしてあげるから」

姉は白く手荒れのない柔らかな手のひらで私の手首を軽く掴んだ。その手が泣きたくなるくらい温かくて、私は涙が滲じむのを堪こらえて俯うつむいた。

「お母様のことは大丈夫。私が足止めしてあげます。着替えたら急いでお父様の部屋に行つて。宮女の試験を受けるための書類を受け取つたら、すぐにこの家を出なさい。お母様が気付く前に家を出てしまえば問題ないわ」

姉の説得に折れ、私は頷いた。

裏からこそそと暖かい室内へ入る。姉の乳母うぼでもあった年嵩としかさの小間使いが、湯を沸かしてくれて、冷え切つた体によく温もりが生まれる。

「これは最近あまり着ていなかった着物なの。これならなくなつてもお母様が勘付くことはないわ。流行りはやの色でなくてごめんなさいね」

姉に渡された着物は私が袖を通したこともないほど上質な代物だった。色褪いろあせも擦り切れもなく、生地にも厚みがある。色に流行りはや廃りすたがあることさえ、今初めて知つた。

姉は先程の言葉通り義母を足止めしに行き、その間に着物を着せてもらう。小間使いは髪を整えるのも手伝つてくれた。端切はぎれを分けてもらい、貝殻の破片はそれに包んで、なくさないよう帯にしつかり挟み込んだ。

そのまま父の部屋に行き、紹介状と戸籍の写しを受け取る。

「ああ、華々に頼んでおいて正解であつたな」

父も姉の着物を着た私を見て、ホツとしたように頷いた。

「すまないが、もしも宮女の道が断られたとしてもこの家には戻らないでくれないか。……お前ももう十六なのだ。なんとか一人で生きる道を探すとよい。これは少ないが……」

そして卓の上に銀の粒銭を置いた。

手切れ金にしては少なすぎるが、この銀銭があれば最悪でも数日は食い繋げる。

私はもう多くを望む気もない。黙つてそれを受け取つた。

父は最後まで私と目を合わせなかった。

扉を閉めた途端、向こうから安堵の息が聞こえたのも、どうでも良かった。この瞬間、親子の縁は完全に切れたのだ。

私は言われた通り、黙つて家を出た。

そのまま立ち止まらずに楊益との待ち合わせの場所へ向かおうと思つていたのだが、

数歩進んだところで、脚の脛すねに何かふわふわとしたものが触れた。スキの穂のようでもあり、獣の毛皮のようでもあった。

しかし裳裾もすそをめぐって見たが、何もない。

(気のせいかしら?)

だが、そうして一度足を止めてしまうと、やはり姉にだけは最後に挨拶あいさつしておきたいという気持ち膨れ上がり、身を翻ひるがえしてこっそりと庭の方へ回った。

姉はあの小間使いと露台で何事かを話している様子だった。露台にいたのは好都合だ。外から声をかけようとそっとそちらへ向かう。葉の生い茂おほつた木々が上手いことを隠してくれている。もし近くに義母がいても見つからないよう慎重に近付いた。

「――本当に、お母様ったら困ったこと」

姉は眉根を寄せて困ったように息を吐いていた。そんな些細ささいな仕草にも色気が混じっている。朱華という名の通り、華やかで美しい姉。

「あんなにいじめて、ねえ。あれでは近所に悪評が立つのも当然ではなくて。私、本当に恥ずかしくて……」

「ええ、ええ……」

姉が一方的に喋り、年嵩としかさの小間使いはにこやかに相槌あいつづを打っている。

その話の内容が義母と私に関してだと気が付くのに、そう時間はかからなかった。

「いくら為さぬ仲だからと言って、あのようにいじめ抜くような母親がいる家に、良い婿など来るはずないじゃないの」

「さようでございますね」

「でもまあ、ようやくアレも出ていったのだし、お母様も落ち着くでしょう。そうすればいくらでも婿のなり手がやってくるわ。私にはこの美貌があるものね。ふふ」

「ええ、お嬢様は本当にお美しいですから」

「それに引き換え、……ねえ?」

「まるで案山子かかしに着せた心地でございました。お嬢様の着物があまりにも似合わないものですから、もうどうしようかと」

「まあ、そうでしょうね。あの顔ではね。顔しか取り柄のない愛妾の娘がアレじゃあ悲惨なこと。けれどあんな古くさい着物なんか大喜びするなんて、可哀想な子よね。もう少しくらい恵んであげれば良かったかしら。ほら、お母様がアレをいじめるのを